



公正な人事評価のコツは、バットマンになること?! 「バットマン評価」

人事評価を行うとき、「どうしても個人的感情が入り込んでしまう...」と悩んだ経験はありませんか？実際、人間が行う評価は客観的に行うことが難しいです。どうしても主観的が入ってしまいます。だからといって主観的評価が必ずしも悪いわけではありません。しかし、個人的感情に偏った「主観」では公正な評価はできません。

では、どのようにすれば主観的な価値観は大切にしながらも、公正で納得性の高い評価ができるのでしょうか？そのヒントが『バットマン評価』にあります！

1. 人間は感情的に判断してしまう生き物

ある研究によれば、人間の意思決定の95%が感情を基準に行われるそうです。感情的になってしまうと視野が狭まり、大局的な判断が難しくなります。



感情が判断を曇らせる

人間の意思決定の95%が感情を基準に行われ、視野が狭まります。



気に入った社員に甘くなる

好意を持つ社員には無意識に評価が甘くなりがちです。

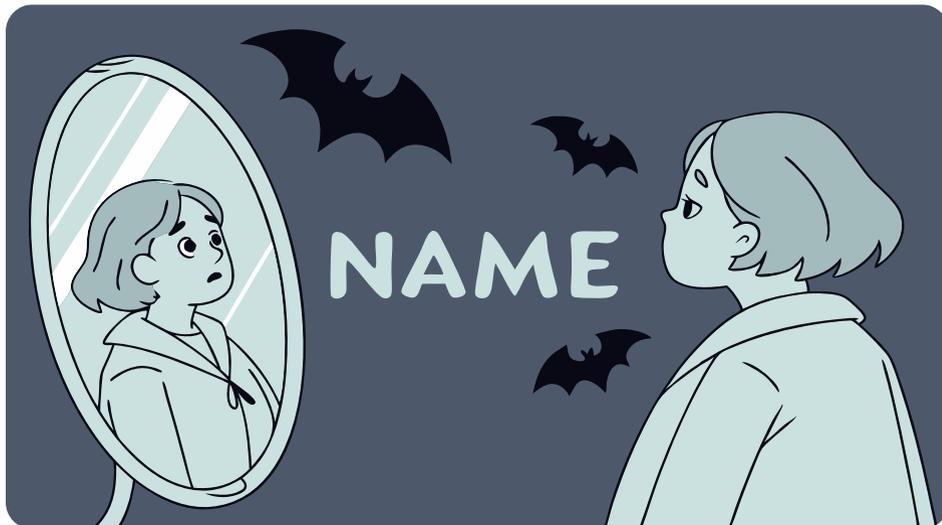


苦手な社員に厳しくなる

反対に、苦手意識のある社員には必要以上に厳しく評価してしまいます。

このように感情に左右される私たちの判断だからこそ、評価においては、たとえ主観的な価値観は大切にしながらも、客観的方法を取り入れる必要があるのです。

2. 「私」ではなく「第三者視点」を使う



ミシガン大学のイーサン・クロス教授は、エボラウイルスの恐怖に対して「私」の代わりに「自分の名前」を使って自問するという実験を行いました。結果として、人々は自分自身から距離を置くことができ、病気をむやみやたらに恐れるのではなく、冷静で客観的な判断を下せました。

「私はどう感じる？」ではなく、「〇〇（自分の名前）はどう感じている？」と問いかけることで、感情的な偏りが軽減されたのです。

興味深いことに、この手法は日常生活のさまざまな意思決定にも応用できます。重要な決断を迫られたとき、「私だったらどうする？」ではなく「〇〇（自分の名前）だったらどうアドバイスする？」と考えるのが効果的です。

3. バットマン効果でさらに効果アップ！

さらに効果的な方法として、ハミルトンカレッジのレイチェル・ホワイト助教の「バットマン効果」という研究があります。子どもたちに退屈な作業をさせた実験で、以下の3グループを比較しました。

- 「私は頑張っているか？」と自問するグループ
- 「自分の名前」を使って自問するグループ
- 「バットマン」のような理想の人物をイメージして自問するグループ

結果、「バットマンになったつもり」で取り組んだ子どもたちは、最も高い集中力とパフォーマンスを発揮しました。この方法により、自分自身の感情から距離を置き、より目的に忠実に行動することができたのです。

実際、スポーツ選手や一流ビジネスマンも、自分の憧れる人物や尊敬する人物をイメージして、集中力や冷静さを高めています。例えば、野球選手がバッターボックスで伝説の名選手になりきって打席に立つことで、プレッシャーに打ち勝つケースも多く報告されています。



4. 人事評価に応用すると？



通常の評価

個人的な感情や好き嫌いが入り込みやすい



バットマン効果の導入

「理想の上司ならどう評価するか」と考える



公正な評価の実現

感情から離れ、俯瞰的に部下の能力や成果を評価ができる

人事評価でも、この『バットマン効果』は非常に有効です。評価を行う際、「私」として評価するのではなく、「理想の上司ならどう評価するだろう？」とイメージしてみてください。そうすることで、評価対象者を個人的感情から離れて本来の上司という役割に立って見ることができます。それにより公正で納得性の高い評価を実現できるのです。

例えば、評価に迷ったとき、「バットマンだったらこの部下をどう見るか？」と考えることで、自分の感情や個人的な好き嫌いから離れ、本当に部下の能力や成果に基づいた評価ができるようになります。

ある企業では、評価者研修でこの方法を導入した結果、「社員のモチベーションが上がり、公正感が向上した」というフィードバックを得ています。

まとめ：公平な評価は「第三者視点」で可能になる

感情を認識する

人間の感情を完全に排除することはできませんが、まずはそれを認識し自分自身を俯瞰してみるのが大切です

視点を変える

自分自身を「第三者」や「理想的な人物」に置き換え俯瞰することで、公正性や納得感を高めることができます

効果を実感する

この視点の変化により、部下が評価に対して納得しやすくなり、評価結果への不満や誤解が大幅に軽減されます

公正な評価は部下のモチベーションや信頼感を向上させ、組織全体の生産性向上にもつながります。ぜひ次回の人事評価で『バットマン評価』を取り入れ、たとえ主観的ではあるけれども、公正で納得感のある評価を実現してみてください。